

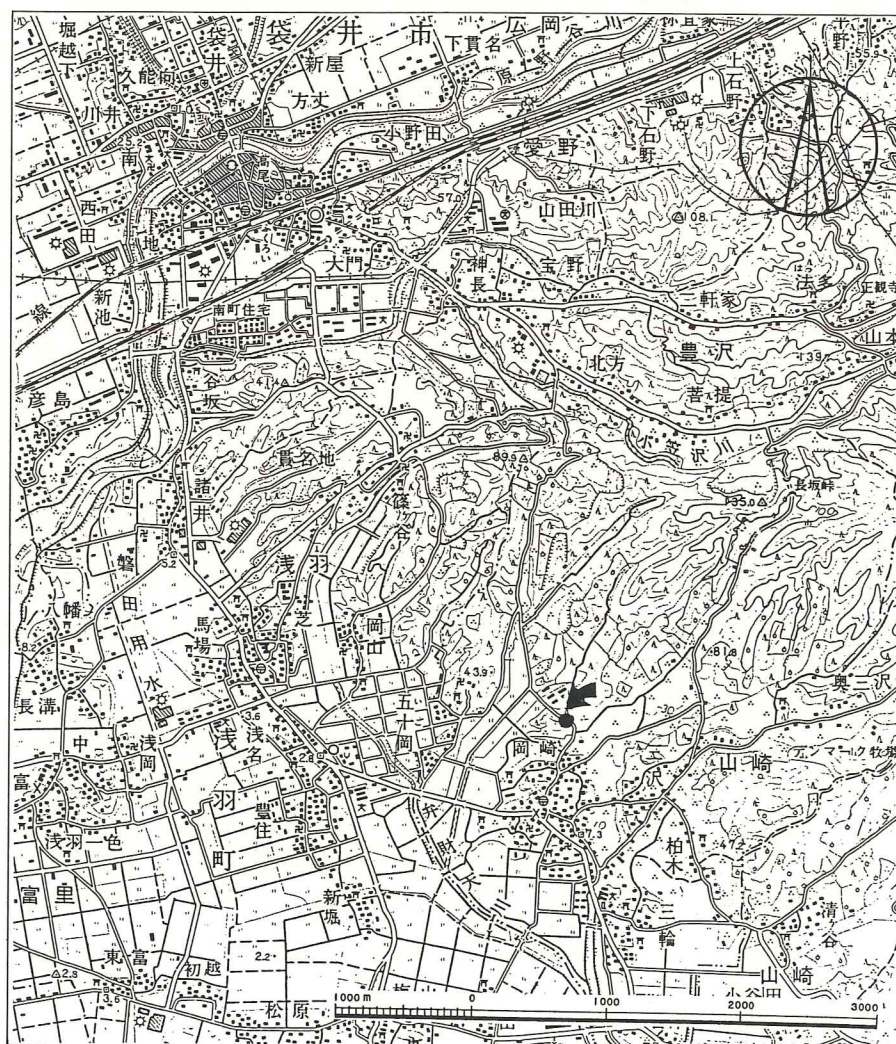
えもんざか 衛門坂 古窯跡

1989.3 静岡県袋井市教育委員会



例 言

1. 本書は、昭和63年6月7日～平成元年2月28日に、袋井市岡崎 5046-2外で実施した「63 農免中遠南部2期地区調査委託その1」の衛門坂古窯跡発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、静岡県中遠農林事務所長望月秀一を委託者とし、袋井市長を受託者として袋井市教育委員会を調査主体として実施した。
3. 発掘調査は、永井義博（袋井市教育委員会）が静岡県教育委員会文化課の指導を得て担当した。本報告書の執筆・編集も永井義博が担当した。
4. 今回の衛門坂古窯跡発掘調査は、静岡県中遠農林事務所の全面的な協力のもと実施された。ここに記して感謝したい。
5. 静岡県中遠農林事務所での事務は防災課 遠藤正敏氏が担当した。
6. 袋井市教育委員会での事務は、社会教育課が担当した。
7. 調査資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。



▲ 衛門坂古窯位置図



第1章 衛門坂古窯跡とは

▲小笠山の支丘陵の谷部に位置する

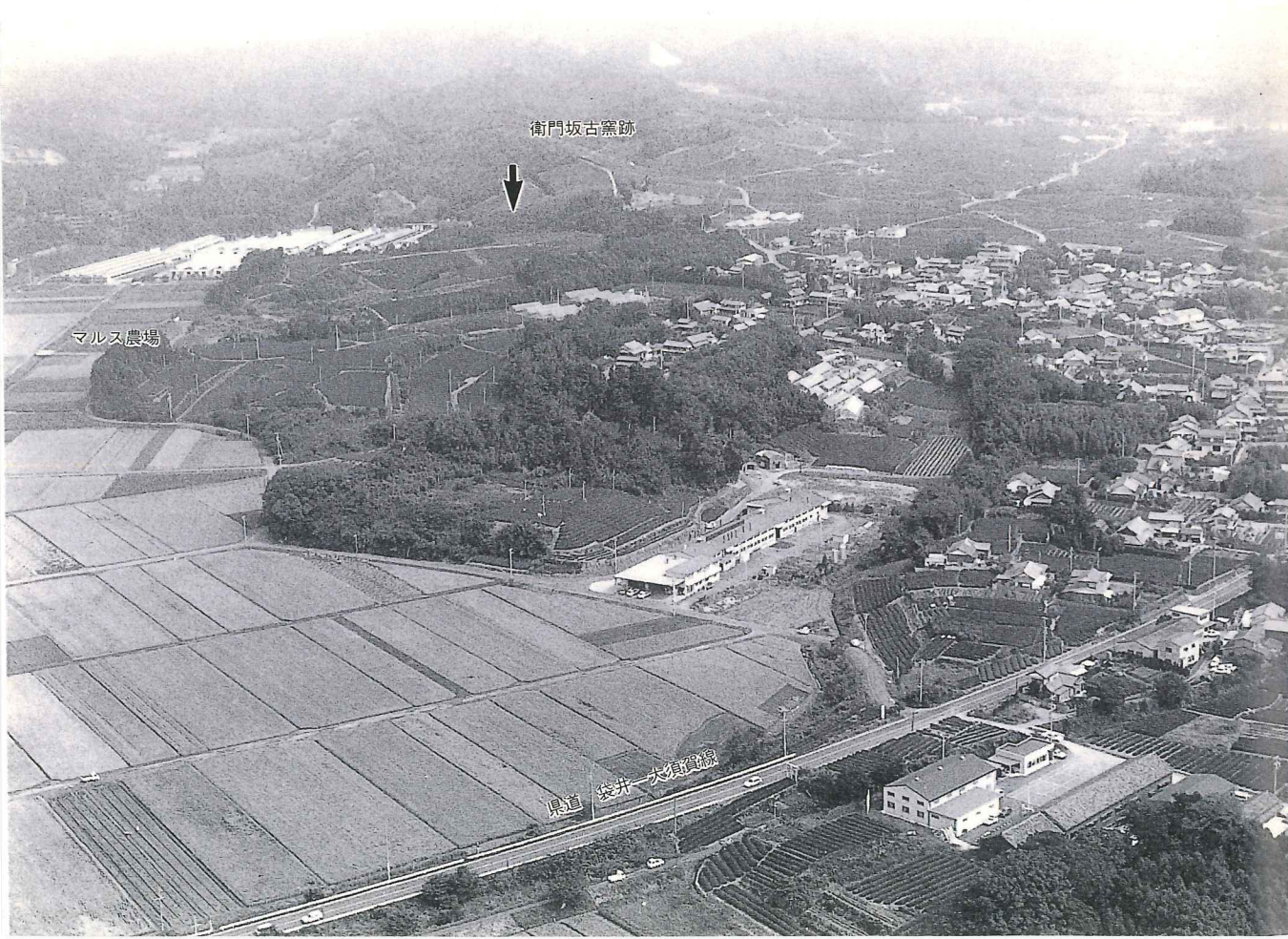
衛門坂古窯跡は、昭和30年代の初め静岡大学教育学部浜松分校の歴史研究部の学生によって、土器片が採集されたのが遺跡発見のきっかけと言われており、この当時は荷車がどうやら引いて通れる小道が丘陵の斜面を削って通っていた。その後、たびたび考古学者や学生によって斜面に露頭している窯体の断面から遺物が採集されて現地には各所にイモ穴状の落ち込みが多数残ってしまった。また、大雨による土砂崩れで小道が埋まり、それに伴う市道の拡幅工事によって再び窯体は削り取れており、そのたびに緊急措置として埴輪片・須恵器の採集がおこなわれていた。衛門坂古窯が位置する谷は、遺跡が発見される以前から袋井市の不燃物の埋立地となっており、谷底はもちろん、窯跡の北側に位置する灰原～前庭部付近まで古タイヤ、瓦クズ、建築廃材、農薬や化粧品の空ビンなどのゴミによって覆われていた。また、夜になるとこっそりゴミを捨てにくる者が後をたたず、生ゴミやビニール等も道路の近くに散乱して、地元民も窯跡の存在を忘れかけていた。

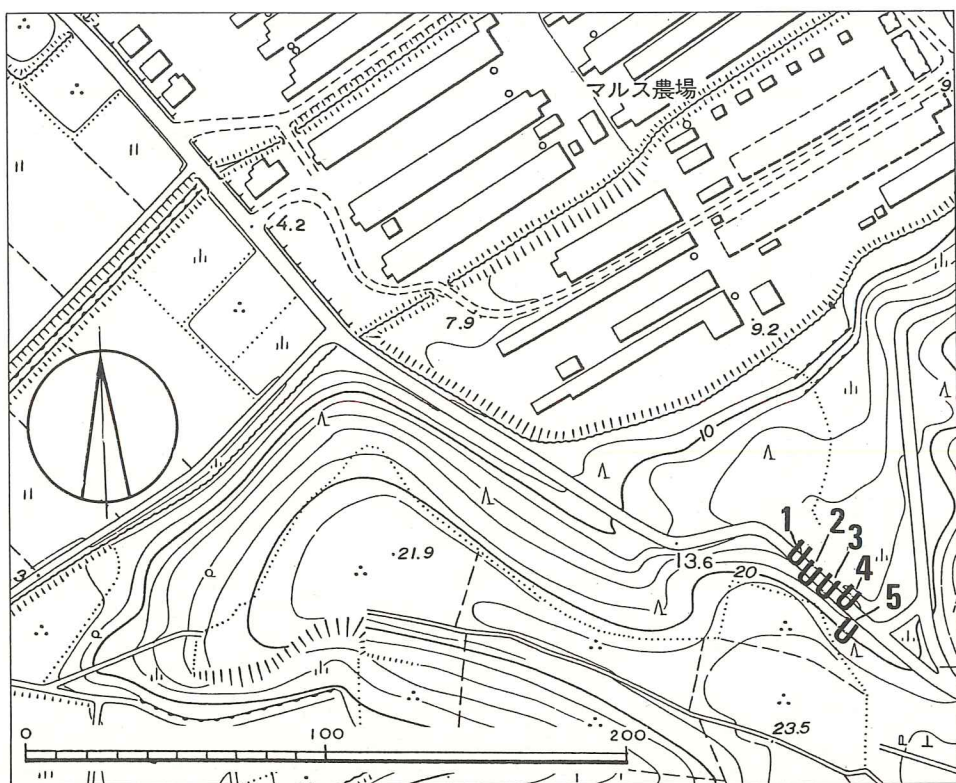
このように、衛門坂古窯は6世紀に操業を終えてからは歴史の表舞台からすっかり姿を消して、中・近世古文書はもちろん、昭和5年編纂の『静岡県史』にもその記述はみられない。昭和41年、遠江考古学研究会の手によってまとめられた『大沢・川尻窯調査報告書』の中では「古墳時代様式の須恵器窯」として浜松市有玉古窯とともに第Ⅱ期の遺物として紹介されており、この後、各報告書や概説書の中で静岡大学生が採集して現在浜松市博物館で保管している資料を中心に次々と報告がなされるようになった。

第2章 発掘調査に至る経過

昭和60年、袋井市教育委員会は、袋井市岡崎に所在する大畑遺跡内に静岡県天竜川農業用水建設事務所がファームポンドを建設することになり、建設場所の決定にあたり協議を重ねていた。時を同じくして、静岡県中遠農林事務所職員と地元・笠原地区の代表者が来庁され、農免道路の設計図とともに予定地内の遺跡の所在の確認を依頼された。内容は、大畑遺跡の中を農免道路が通過しないかという問い合わせであったが、路線全体を詳細に確認していくうちに、静岡県内でも最古の窯跡の1つに数えられる「衛門坂古窯跡」を通過することが分かった。市教委としては農林事務所に対して道路設計変更により遺跡をさけて路線計画ができないかをお願いし、農林事務所側も検討したいとのことで帰られた。数日後に再び設計図を持って来庁され検討結果についての報告がなされた。設計変更については遺跡を迂回して工事を行うことも不可能ではないが、そのことによって現地は大きなカーブの残る急な下り坂の道となり、この付近には人家も少なく真っ暗な場所のわり通過車輦は多いなど、交通安全上事故の発生する可能性があり、なんとか直進させたいとのことであった。市教委としては、静岡県教育委員会にも助言を仰いだ結果、衛門坂古窯の中心部である窯体はすでに破壊されていることもあり、交通安全上の問題も大きく、今回は発掘調査により記録にとどめることとし、遺跡破壊もやむなしとの結論に至った。

▼衛門坂古窯跡の周辺



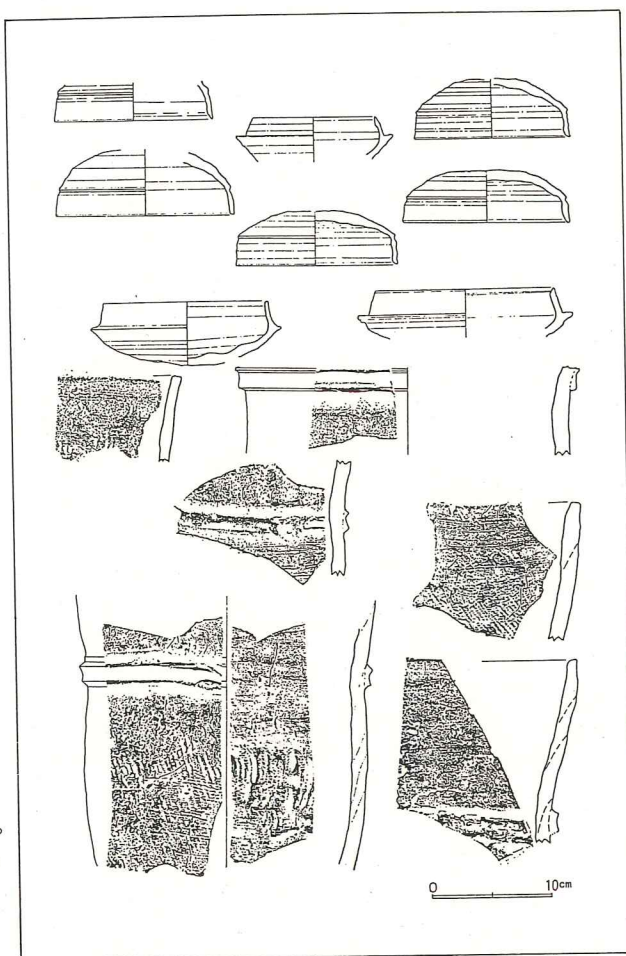


▲衛門坂古窯群分布状況図

第3章 調査経過

- ◎ 6月16日 契約開始日
- ◎ 6月16日～20日 先発隊用地内の草刈り開始。
- ◎ 6月21日 窯体の一部（4号窯周辺）の表土の除去。
- ◎ 6月22日 静岡県中遠農林事務所より遠藤氏が現地の進行状況を確認にみえる。
プレハブ・仮設トイレの建設完了。表土の除去作業。
- ◎ 6月27日～29日 道路に面したカッピングの精査。埴輪片、須恵器片は出土するが窯体は確認されない。
崩土には一部、焼土・炭化物が混入している。
- ◎ 7月7日 南地区5号窯灰原は第2層の調査に入る。
- ◎ 7月8日 南地区5号窯灰原、引き続き第2層の調査を継続。
- ◎ 7月9日 南地区5号窯灰原は第3層の調査に入る。
北地区は昭和32年の遺物採集の跡（地元の人よりご教示）を再調査する。
- ◎ 7月11日～16日 南地区5号窯灰原は引き続き第3層の調査。
北地区は昭和32年の遺物採集の跡から周囲へ調査区を拡大する。
斜面を下って西側に調査区を広げる。
- ◎ 7月18日 南地区5号窯灰原、北地区4号焼成部の調査が続継して行われている。
浜松市博物館長 向坂鋼二氏、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所調査研究一課長 平野
吾郎氏が来訪。現地を見学する。
- ◎ 7月20日 重機にて、灰原上に厚く投棄された不燃物の堆積を除去する。古タイヤ、壊れた自転車、洗
剤、農薬のビンなどが数十年ぶりに掘り返される。とくに農薬のビンは破裂すると底に残っ
た液体から有毒ガスが噴出させ、作業には極めて危険な状況である。灰原の範囲確認の結果
さらに北側（谷の下）へ続いている。
- ◎ 7月22日 2号窯、3号窯、4号窯の灰原の精査。静岡県教育委員会文化課 五島康司指導主事の来訪。
中遠農林事務所 遠藤氏が来訪。

- ◎ 7月23日 北地区完了写真撮影。
- ◎ 7月25日 遺構の測量。
- ◎ 7月26日 4号窯焚き口、5号窯灰原の発掘。
- ◎ 7月28日～29日 北地区のコンタ図の作成。
- ◎ 7月30日 北地区の測量。一部の器材のかたづけ。
- ◎ 8月1日～2日 東西ラインのセクション実測。
- ◎ 8月3日 セクションベルトの除去。
中遠農林事務所より来訪。
一部、見学者用に土器洗いを行う。
- ◎ 8月4日 セクションベルトの除去。
北地区の調査終了に伴い
重機による埋め戻し。
- ◎ 8月5日 4号窯の第2次床面を切る。
遺構実測。
- ◎ 8月8日 4号窯の第1次床面の実測。
器材の撤去。すべての
現地調査を終了する。
- ◎ 8月9日～2月15日 器材の修理・
清掃。出土遺物の水洗い
註記。土器の復元作業。
出土遺物実測・写真撮影。
報告書の原稿執筆・編集。
- ◎ 2月27日 衛門坂古窯跡発掘調査報告書完成
- ◎ 2月28日 委託契約完了日



▲衛門坂古窯採集資料（『袋井市史』より）

第4章 調査体制

- 調査計画 静岡県中遠農林事務所
- 調査指導 静岡県教育委員会 文化課
- 調査主体 袋井市教育委員会

教	育	長	鈴木 勲一（～12/31）
教育長職務代理者	加藤 昭喜（1/1～）		
社会教育課長	井口 育夫		
文化振興係長	小粥 保夫		
主任学芸員	吉岡 伸夫		
主	事	建部 千代子	
学	芸	員	永井 義博（調査担当者）
- 調査参加者 三浦久雄 海野昭平 岩崎良男 加藤博司 山崎荘一 諸井栄 高橋秋義
 安間しげ子 榑松光子 寺田矩江 寺田松枝 高橋さかえ 高橋巳代子 永田のお枝
 仲根世始子 早川里美 山下悦子 山本はつ江 早川保子 松田和子 太田みか

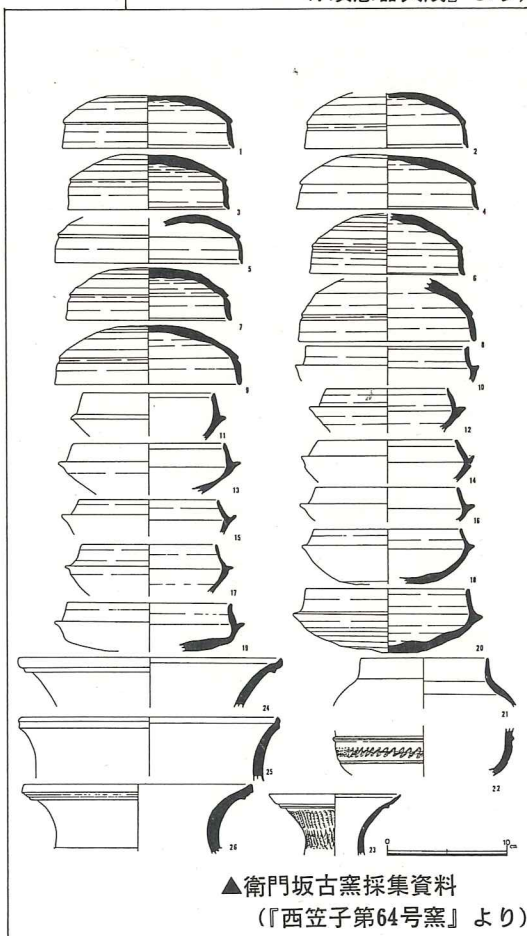
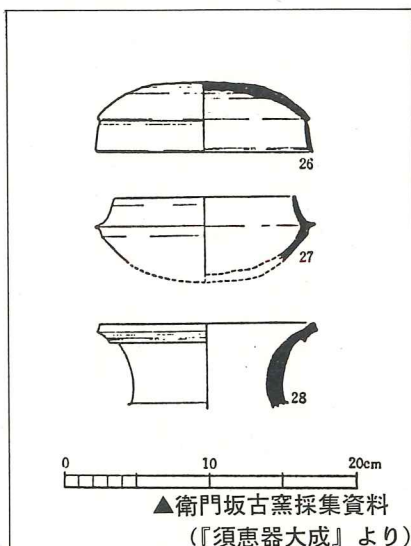
第5章 調査方法

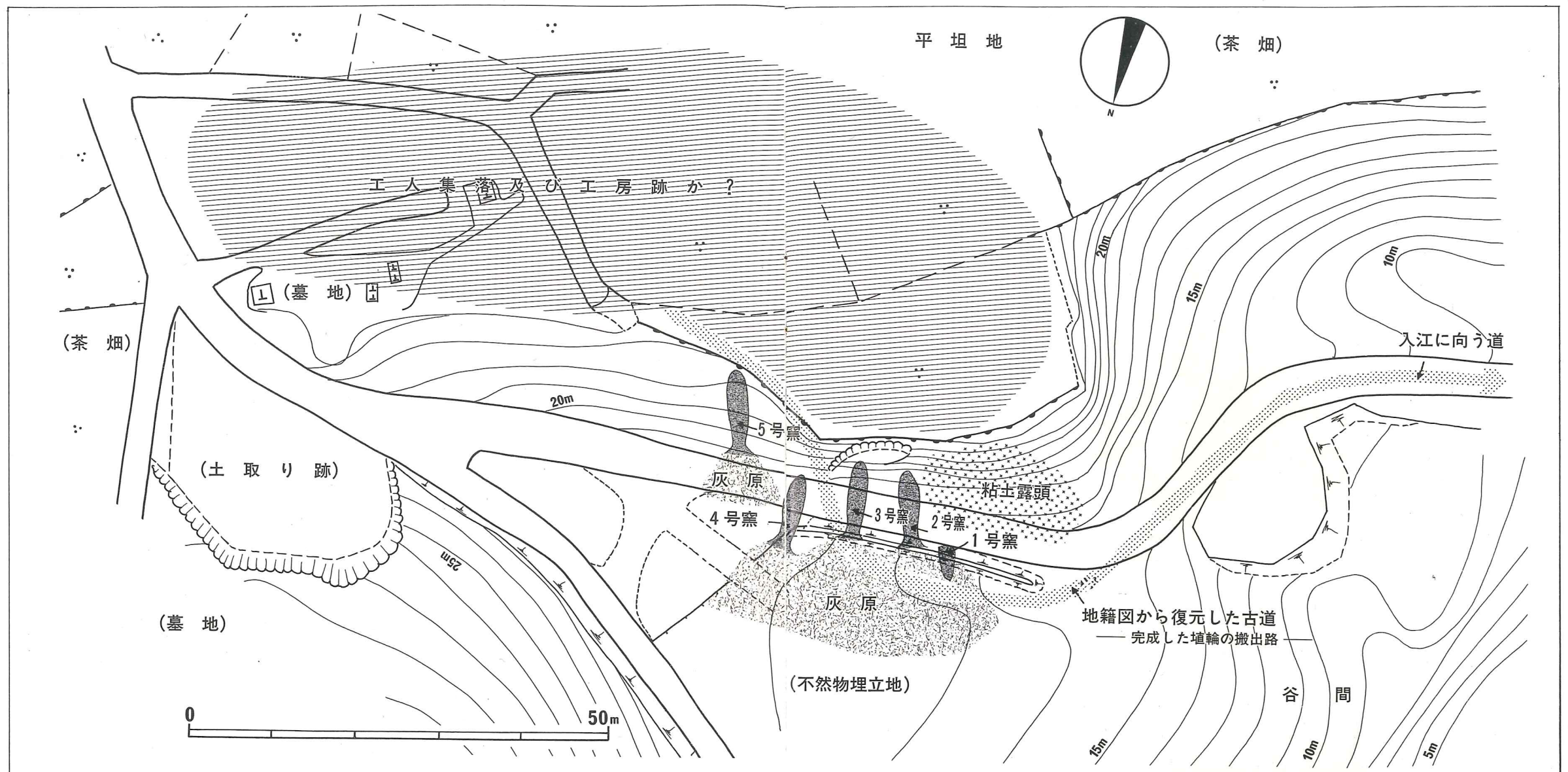
衛門坂古窯跡から採集された遺物は、現在のところ2ヶ所に保管されている。1ヶ所は昭和32年に静岡大学の浜校分校の郷土研究部員の手によって採集された一群で、現在は浜松市博物館の管理のもと置かれている。もう1つは衛門坂古窯と交差してしまった舗装道路の最初の工事の際に発見され、袋井市教育委員会の職員によって採集された遺物である。そして、この時の貴重なデーターが断片的ながらメモしており、これに地元民の証言を加えて調査方法を検討した。

さて、調査区をカバーする基本グリットの設置であるが、現地が丘陵の中腹で、さらに細長くカーブしているところのため、道路の設計用のセンターを基準として各小地区に分けて実施した。基本的には現道を基準に、北地区と南地区に分け、それぞれの地区のなかでさらに東部分、西部分と細分して対応した。レベルも道路設計用のベンチマークを使用した。

調査方法は、全面発掘を基準に考えて部分的にはトレンチで対応した。表土を除去した段階で、遺構を確認できないところでも、窯跡の持つ遺構としての性格からダメ押しのサブトレンチを入れて地山面までの最終確認を行った。北地区の2～4号窯の灰原部分は、当初はセクションベルトを残して層位確認をしながら掘下げていったが埋め土内に残る農薬のビンから漏れてくる有毒ガス（作業員中から目の痛みを訴える者も出るほど）と、雨による土砂崩れにより長期の調査が不可能となり、緊急に遺物採集を中心とした調査に切り替えた。

現地の実測図作成は20分の1を基本に詳細な部分は10分の1の図で対応した。写真撮影はアサヒペンタックス6×7とニコンFEを併用した。





第6章 地理的環境・歴史的環境

信州諏訪を源として南アルプスの水を集めて南下する天竜川は、多量の土砂とともに太平洋に流れ込んでいる。この土砂は、遠州灘の速い流れにおされて小笠山の南までその影響を与えている。小笠山の南西、衛門坂古窯跡の位置する丘陵の南面は、かつてはこの土砂によって閉塞された静かで大きな潟が広がり、現在から考えるよりはるかに水上交通の便の良い場所であったと考えられている。

衛門坂古窯跡の位置する小笠山の地質は、中期更新統の礫・砂・泥（粘土）層からなり、主体をなす部分は河成礫層を主として間に何層もの淡水ないし内湾成泥層を挟む小笠層群と呼ばれる地質である。岩種はよく円磨された10cm大の砂岩が多く、太田川、天竜川の岩石とは異なり、はるか東方の大井川にその形成要因を求めなければならない。

さて、この地の人々の営みは、縄文時代の中期より始まり周囲の豊かな自然と、南向きのゆるやかな斜面の好条件の立地の中で大きな集落を形成し縄文時代後期・晩期にその最盛期を迎

▲衛門坂窯復元全体図（ ）の中は、現状説明える大畑遺跡の登場によって物語が始まる。しかし、次の弥生時代に入ると、人々の生活の痕跡は突然この地より消えて、太田川では北の鶴松遺跡、原野川では原川遺跡の位置するそれぞれの中流域へ移っていく。このあたり稲作との関連が指摘され、小笠山周辺では初期水稻耕作が定着する条件が整わなかったと考えられている。

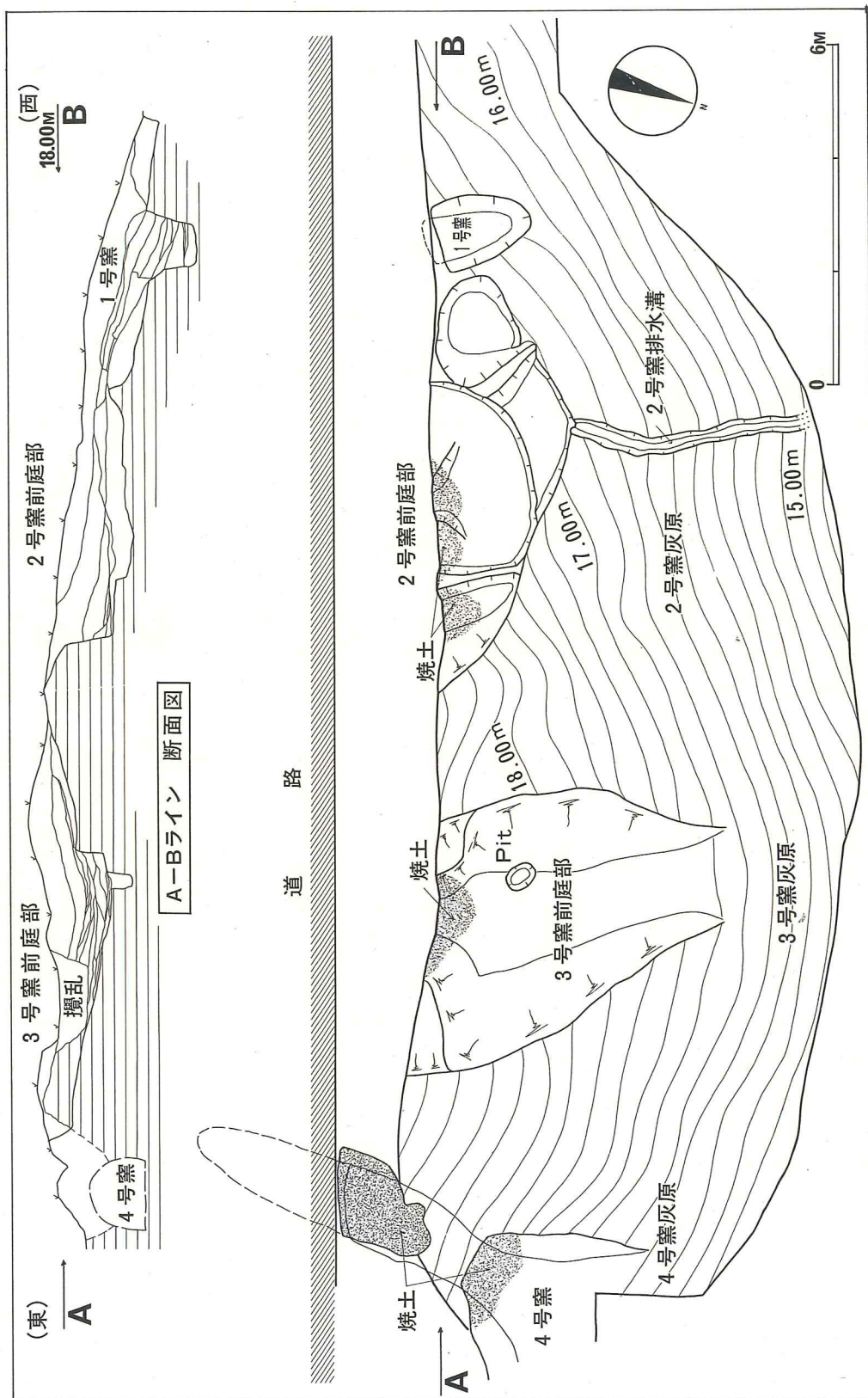
衛門坂古窯跡の操業が開始される古墳時代になると、再び人々の暮らしがこの地に戻り、周辺部にもいくつかの古墳が築造されるようになってくる。5世紀後半の古墳は、太田川中流域に集中しており、下流域では検出例はほとんど知られていない。最近の調査例としては、袋井市愛野の愛野向山古墳群（5世紀後半～6世紀前半の60余基からなる古墳群）が開発に伴う発掘調査で資料が増加している。その他、浅羽町・大須賀町内でも、この時期の遺物の出土例はあるとのことであるが、正式な発掘調査の報告はなされていないようである。現在のところ、集落跡・古窯跡等の調査報告例も、ここ小笠山西麓周辺では確認されておらず今後の調査例の増加を待ちたい。

第7章 遺構の概要

衛門坂古窯跡は小笠山の西側に、広げた手の指の形のように、細い谷奥に5基の窯とその関連施設及び工人住居が位置している。ここは、周囲への眺望はまったくきかない丘陵の裏側で集落などの生活の場としてではなく、須恵器と埴輪を生産するための工房として占地している。窯の位置する場所は、狭い谷奥の斜面の中腹で、標高は16~20mの間である。今回の調査では谷の入り口から構築した順に1号~5号と仮称したが、築造の新しい窯ほどレベルの高い位置で場所的にも谷奥に向かってのぼっていく傾向がある。丘陵下は、現在は水田となっているが古環境としては入江のように浅い潟が奥深く入り込んでいたと思われる。この生産遺跡の全体像の復元としては、6ページで示したとおりである。生産の中心となる窯は、丘陵斜面の中腹に西側から順番に築かれ、その北側の斜面に灰原が広がっている。このうち、1号窯とした窯は未完成であるのか、それとも別の用途で掘り抜かれる途中で中止されたのか、実際のところ不明である。事実としては、この遺構が一度も火を受けていないということであろう。2号窯は、この古窯跡のなかでは時期的に一番古く、5世紀末~6世紀前半ころの操業である。1号窯西側で出土したミニチュア土器が制作されたのは、この2号窯の操業以降のことと思われる。

▼ 衛門坂古窯北地区調査風景（北より）





▲ 衛門坂古窯北地区実測図

衛門坂 1 号窯（未操業の窯）

1 号窯は、衛門坂古窯跡の一番西端に位置し、標高 16.40 m の高さである。一応、窯という名称で呼んでいるが、実際この遺構に火を入れた痕跡は皆無である。そのため、用途としては粘土採集坑や、操業に必要な原料や水の貯蔵穴とも考えられる。しかし、第 8 図の E-F ラインのエレベーションに見られるように、さらに奥に向かって掘り進もうという様子が見受けられることから本文ではなんらかの理由で築造を中止した未完成の窯として報告したい。この遺構の上部南側はオーバーハングして薄い天井部を持っていたようであるが、セクションでも確認できるように 2 号窯の操業時に、この窯の灰原の重さにより天井部は遺構内に落下している。1 号窯の土層堆積は、この遺構の最下層にオーバーハングした天井部の土が落下して堆積しており、その上に黒色灰層、焼土層、生焼けの須恵器甕破片の堆積層の順に堆積していた。そのことから、灰原の落下する前は遺構内はからっぽの状態であったと証明できる。規模は、上場で東西 1.2 m、南北 1.6 m、下場では東西 0.8 m、南北 1.7 m を測る。確認面から底までの深さは 0.8 m である。1 号窯の西側からは須恵器のミニチュア土器が出土している。セクションより検討すると、この土器は 1 号窯の使用が終了して 2 号窯の操業以降にここに位置したと思われる。また、出土地為は、7 ページの衛門坂窯復元全体図と重ねてみると、入江に降りる旧道に沿った位置にあたる。



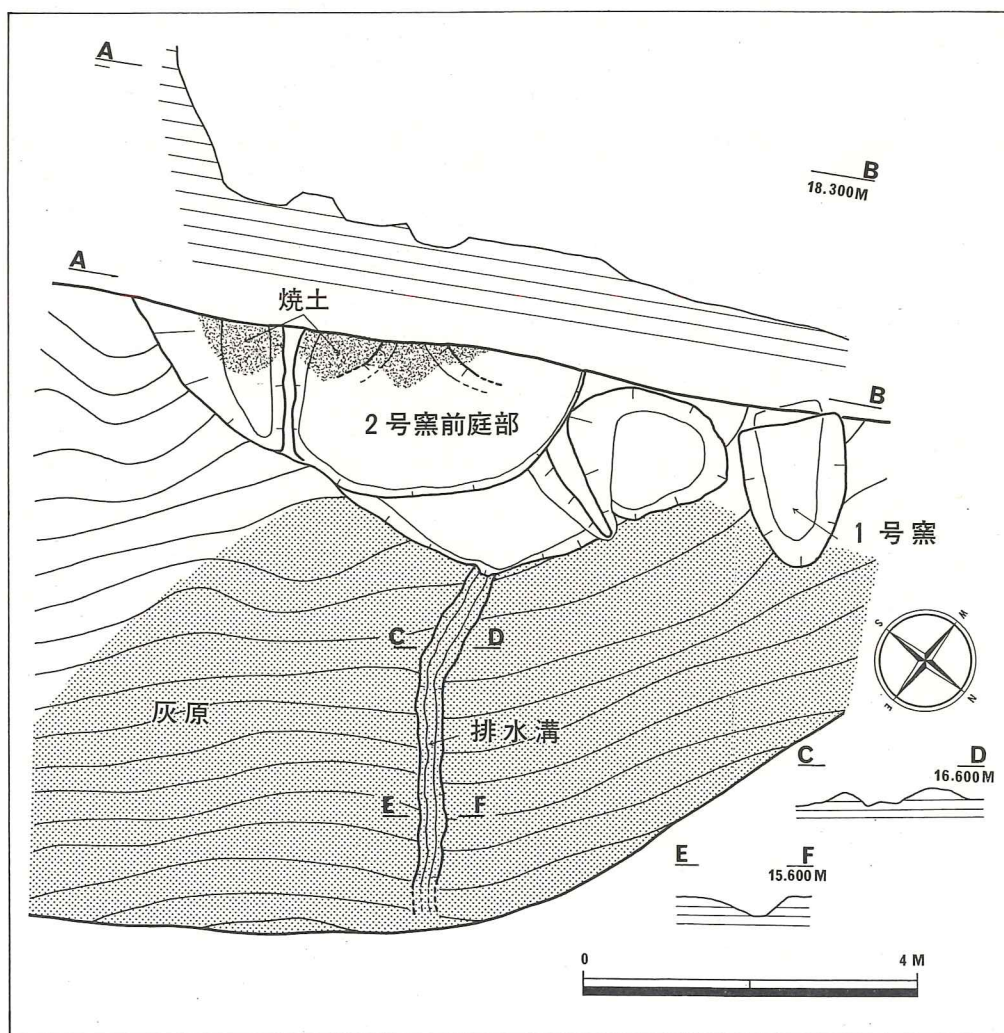
▲ ミニチュア土器出土状況

◀ 1 号窯跡全景（北より）



衛門坂 2 号窯 (田辺編年 T K 47 ~ M T 15 に並行すると思われる。)

衛門坂 2 号窯は、1 号窯に東に隣接して築かれている。土砂崩れや、市道拡幅の際に窯体はすべて掘削されてしまい、今回の調査で検出されたのは前庭部とその灰原の一部のみであった。前庭部は、堅穴住居跡のように掘り窪めており、北斜面には排水溝の跡がある。この窪みの東側が炭化物や焼土の出土が多く、またわずかに地面の一部が焼けており、窯の焚き口にあたるものと考えている。また、この窪みには、多量の須恵器の生焼けの甕の破片が堆積しているがこれが 2 号窯の焼製品であるか、他の窯の灰原なのかは窯体を失った現在では確認できなかった。前庭部の西側、1 号窯と 2 号窯の間で検出された浅い皿状の落ち込みが検出されている。これだけでは、用途の確定はできないが、1 つの考え方として製品を焼くために窯詰めを終わった後、焚き口をつくったり、還元状態にするための閉塞用の粘土を窯の近くで土と灰を水でとき泥状にして作る。この時、地面を削りながら粘土をこねる小穴にその可能性を考えることができる。不定形であまい輪郭から、粘土をこねる時に 2 次的にできてしまった遺構であろう。



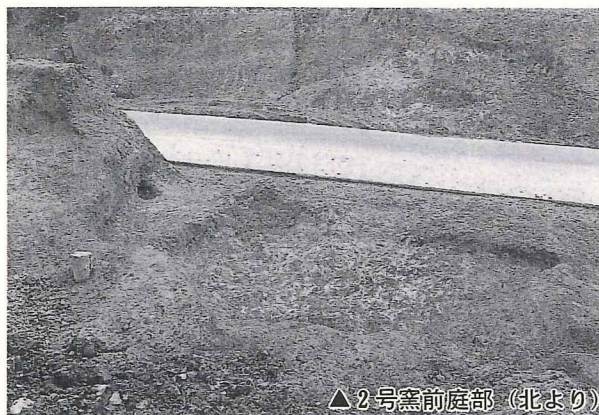
▲ 2 号窯前庭部実測図



▲2号窯前庭部発掘状況



▲1号窯・2号窯土層堆積状況



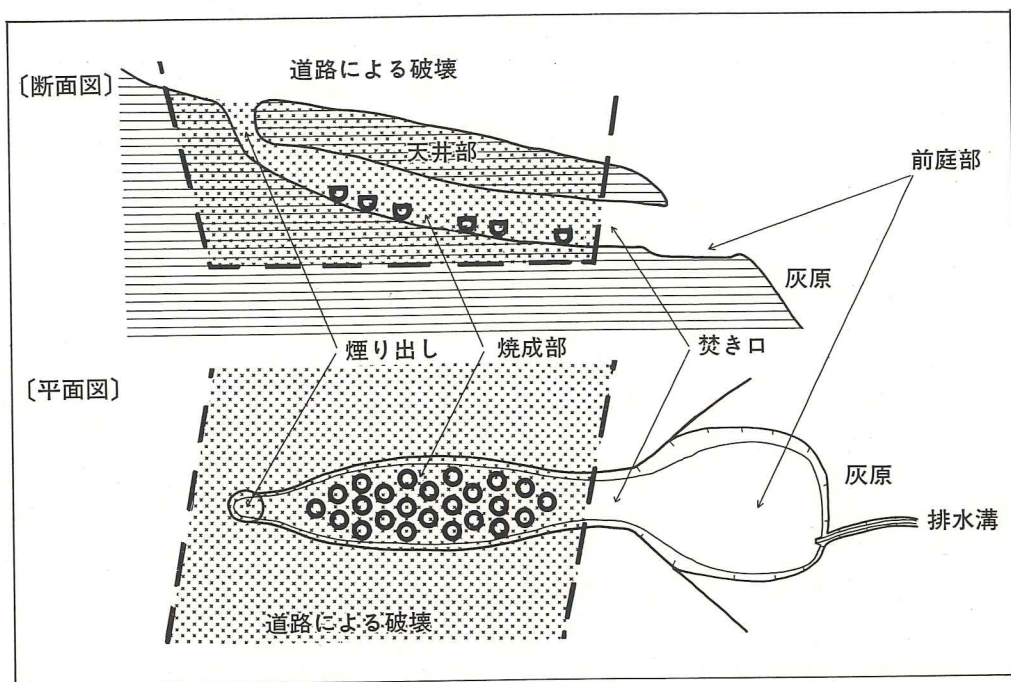
▲2号窯前庭部（北より）



▲2号窯前庭部（西より）

衛門坂3号窯（田辺編年TK10に並行すると思われる。）

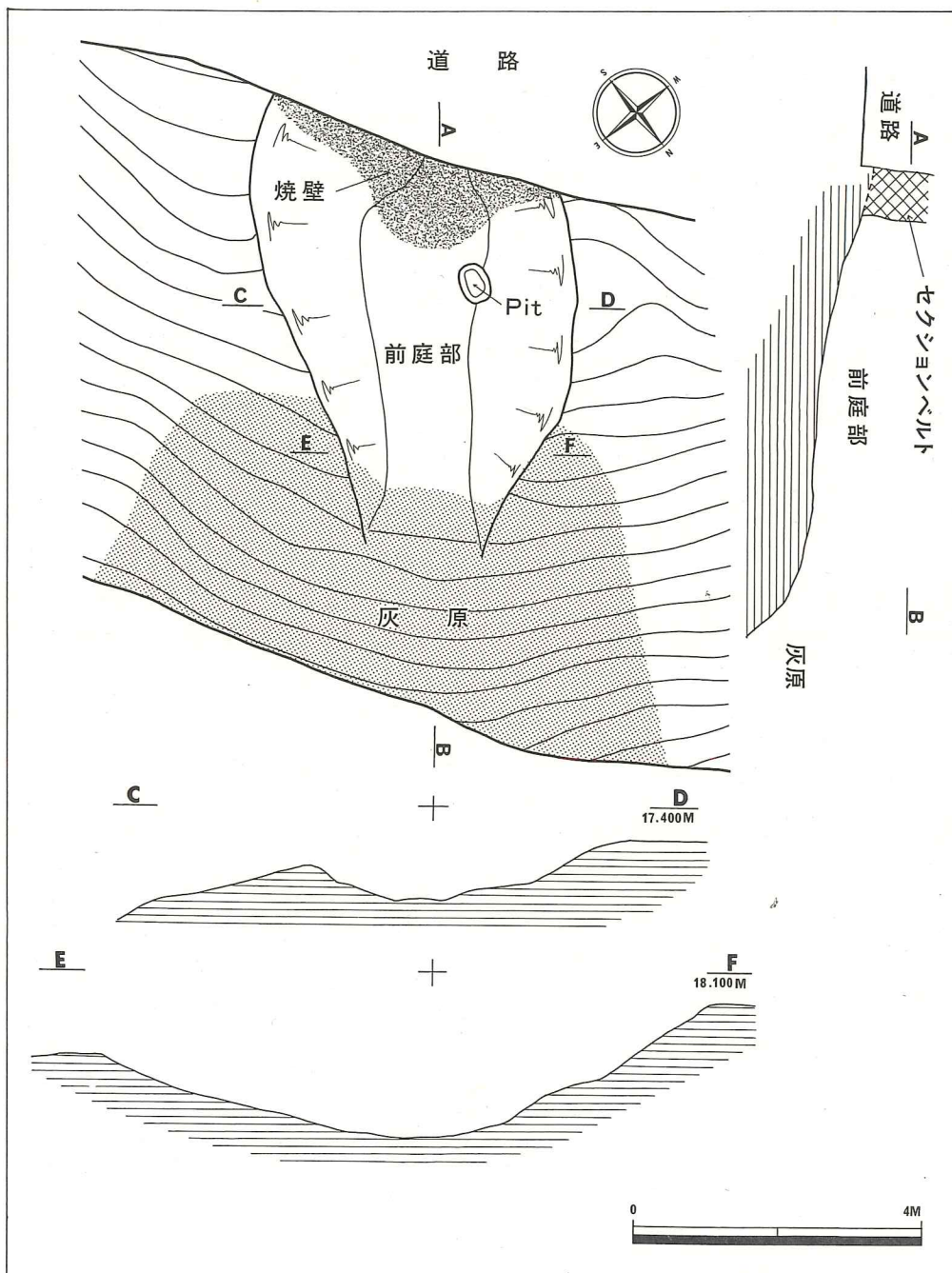
3号窯は2号窯の東側に隣接し、窯跡群の中核に位置する窯で、灰原もこの一群中では一番広く、厚い堆積となっている。この窯も、土砂崩れと市道拡幅で窯体のほとんどを失っており、焚き口と前庭部及び灰原を残している。現存する前庭部は、全長5.5m、幅4.4m、深さ0.5m、の規模である。南側の市道に接した部分の底部と、壁の一部が熱を受けて焼けている。前庭部の中には、直径50cm、深さ40cmのピットが確認されている。また、3号窯の前庭部はかなり広い範囲で盗掘を受けている。14ページの上段の説明図は、この3号窯に代表される窯の破壊状況についてイラスト化したものである。このように、窯の構造から見ても、2号窯～4号窯は窯体のほとんどを失っており遺構の構造に残念ながら言及することができない。同じくこのページの3号窯焚き口部完掘状況の写真は、道路側に残してきたセクションベルトを除去後に前庭部側から焚き口方向に（北から南に）向けて写したものである。窯体はその先のアスファルト舗装の市道部分によって完全に破壊されており16ページの3号窯遺物出土状況の写真でも大きな攪乱で前庭部北側に遺物の出土しない部分がある。この写真には、前庭部の出土遺物として須恵器埴輪片、須恵器坏身、坏蓋、甕破片、甕片などが見られる。3号窯前庭部完掘写真は、セクションベルトを除去する前で、焚き口部から前庭部にかけての状況と、灰層の堆積状態がよくわかる。埴輪の出土状況では、3号窯と4号窯の間の灰原に集中しており、両方の窯の遺物が重複している。埴輪片は、かなり大きな破片も混ざっており焼歪みができたり、破裂したもの、生焼けのものなどが須恵器といっしょに出土している。



▲破壊された衛門坂古窯跡

▼ 3号窯焚き口部完掘状況





▲ 3号窯跡前庭部実測図



▲ 3号窯遺物出土状況（東より）



▲ 3号窯出土須恵器と埴輪



▲ 3号窯前庭部完掘写真



▲ 3号窯灰原出土の須恵器と埴輪



▲ 3号窯（右）と4号窯（左）



▲ 生焼けの埴輪出土状況



▲ 3号窯灰原須恵器壺出土

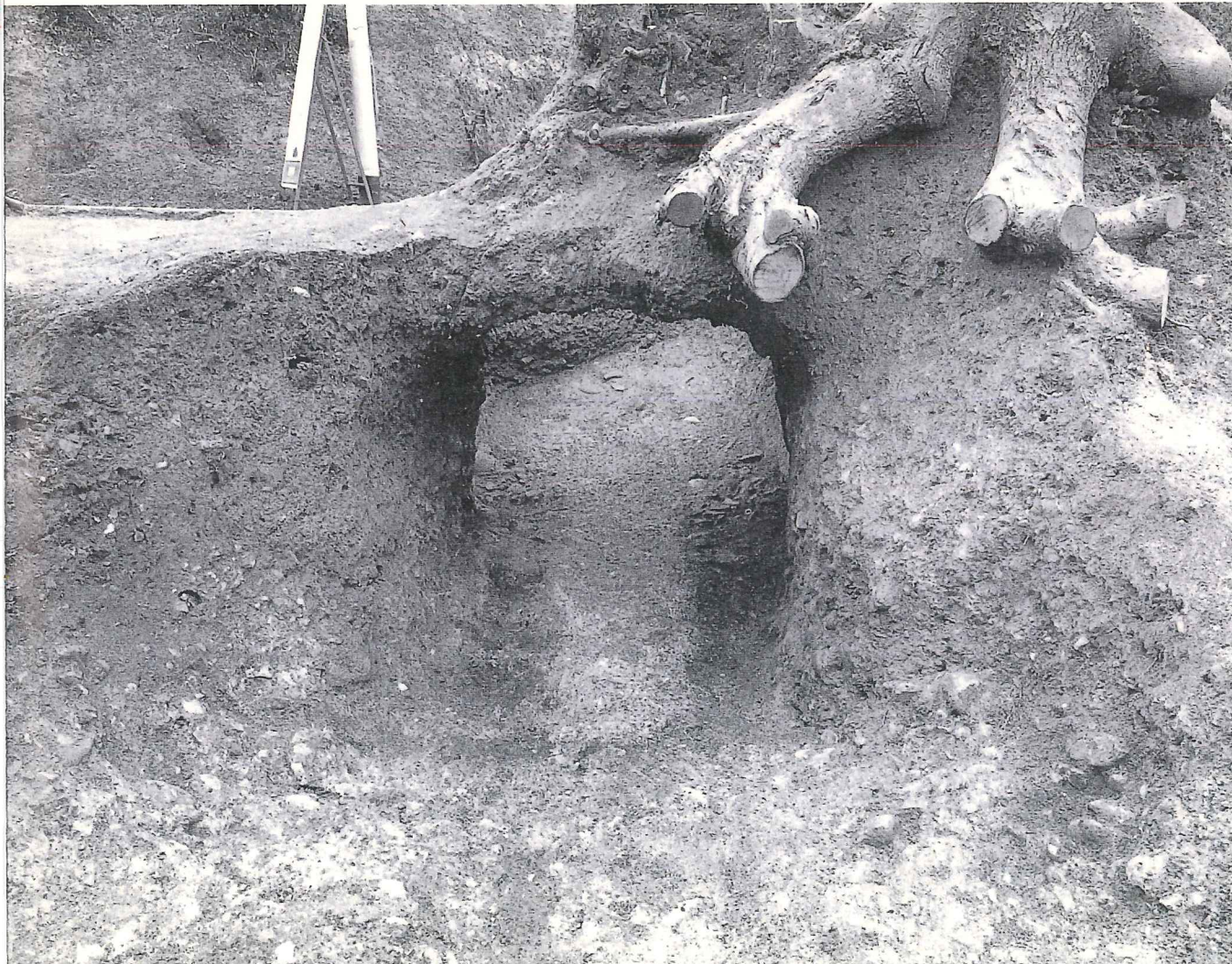


▲ 須恵質埴輪出土状況

衛門坂 4 号窯（田辺編年 T K10 に並行すると思われる。）

4 号窯は、1 ～ 4 号窯の中で一番東に位置する窯である。燃烧部・焚き口・前庭部そして灰原が残っているが、焼成部・煙り出し部の窯体の本体は 道の拡幅時に破壊されてしまっている。現存する遺構の規模は、焼成部の幅 1.3 m、焚き口の幅 0.9 m をはかる。天井部は残念ながら落下しているため計測値はとれない。写真、図面では 3 号窯の天井が残存しているようになっている。これは、窯の上部に大木が根をおろしていて窯壁へ深く入り込んだ状況のため天井部の土を取り去ることができなかったためである。4 号窯実測図では、E－F ライン、G－H ラインの断面図で横線の部分を、残った窯壁として表している。しかし、衛門坂古窯のなかでこの窯が、燃烧部の残存状況が一番よく、天井もかなり上部まで湾曲を見ることができる。窯の壁は青味がかった状態で、ガラス状に熱で融解したり大きく剥がれ落ちたりしている。しかし、残存している部分が少なく 2 次、3 次焼成等で補修したような痕跡は見当たらなかった。窯の床面も良好に残っており、2 回の焼成面まで確認できる。1 次焼成面の上には、焼土と灰と不良品の埴輪片、須恵器片の混じった層が約 7 cm の厚さで形成されており、その上に別の焼成時の遺物が散乱している。一応この状態から 2 回以上の操業が確認できるが、焼成のたびに内部に残った灰・焼土・遺物破片は掻き出して窯内を清掃するであろうから正確な操業回数までは判断できない。

▼ 4 号窯完掘状況（前庭部より）

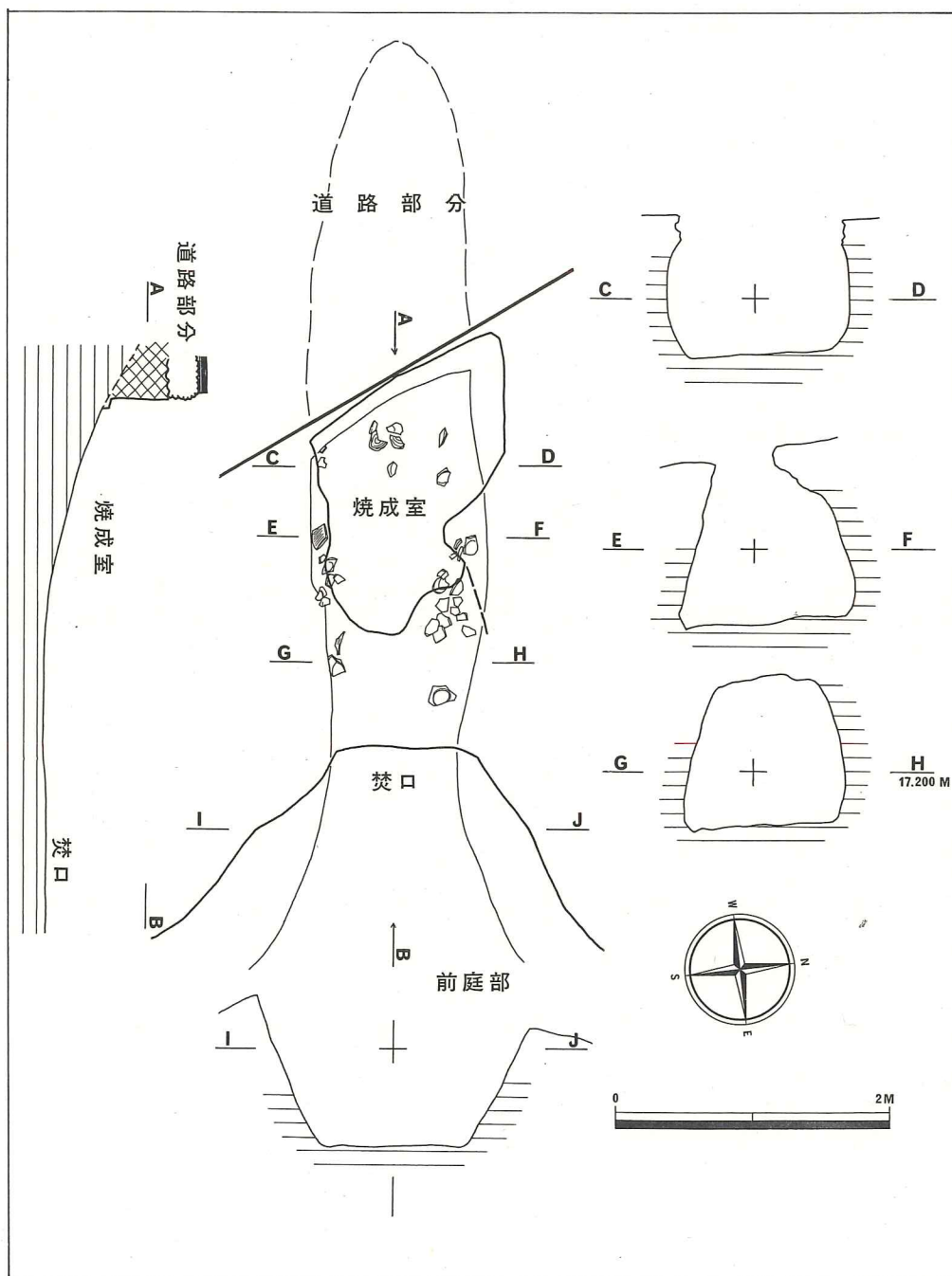




▲ 4号窯東壁の状況



▲ 4号窯底部の第1面と第2面



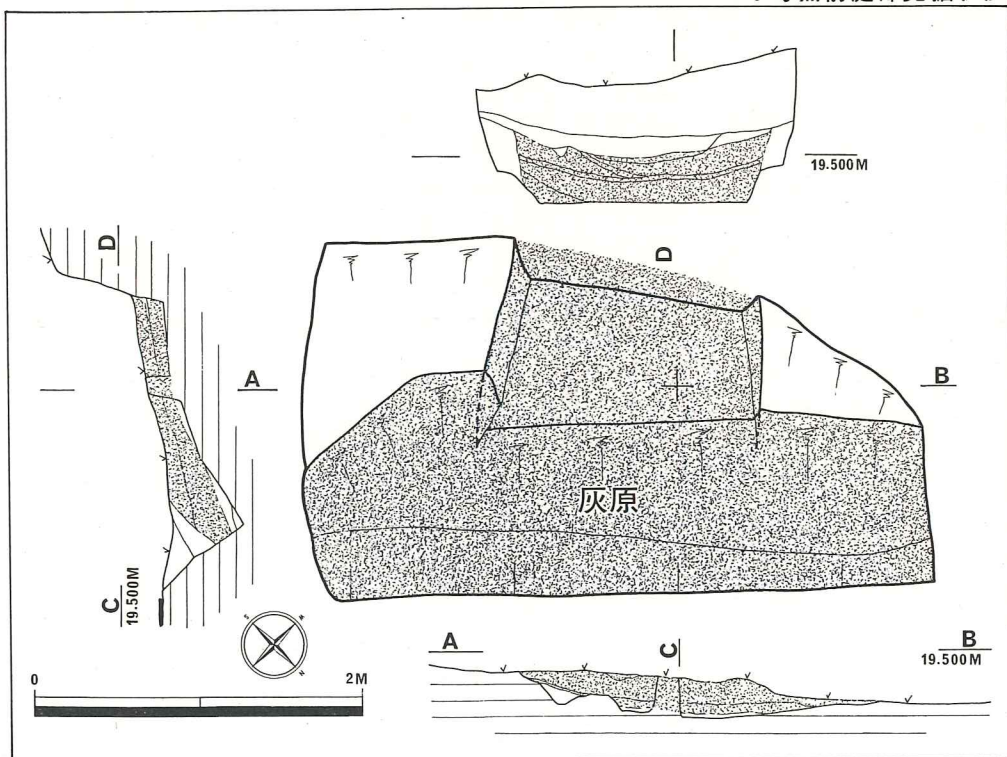
▲ 4号窯実測図

衛門坂 5 号窯（田辺編年 T K 43以降に並行すると思われる。）

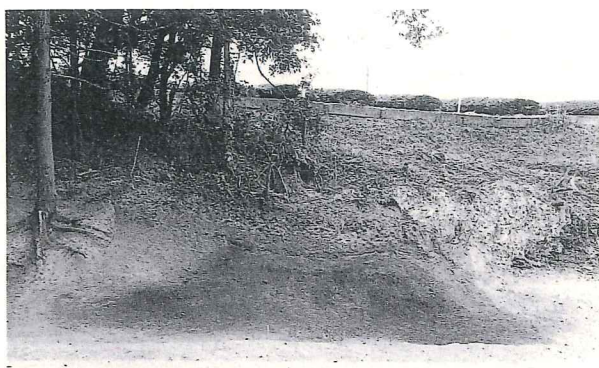
5 号窯は衛門坂古窯群のなかで、ただ 1 基市道の南側から検出された窯跡であるが、調査区の用地の関係から灰原の一部の調査しかできなかった。窯体の残存状況については、道路南側の用地外の斜面に、比較的良好なかたちで残っていると思われる。このことは、南側の斜面に残る灰層のセクションからも確認できる。灰原の先端は、5 号窯灰原実測図のとおり道路のアスファルトの下まで潜り込んでいるが、道路北側のトレンチでは検出されていないので、市道の直下でその散布範囲は止まっていると思われる。灰層は間層を挟んで、上下に 2 層が確認されているが、出土する遺物では時期を判断するほどの差は感じられない。前庭部の幅は約 1.7 m で、やや狭い感じを受けるが焚き口部、燃烧室の規模が確認できない現在では窯の形態についてこれ以上のコメントは控えた。地籍図で見ると、この窯の西側にそって丘陵上の集落に向かう赤道が確認できるが、窯の分布状況から、この道は衛門坂窯の操業時からずっと使用された道で、土器・埴輪の下の入江までの搬出や丘陵上の住居への移動に利用されていた可能性も考えられる。



▲ 5 号窯前庭部完掘状況



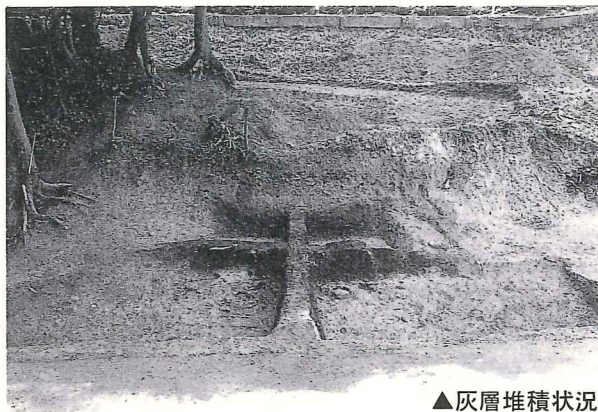
▲ 5 号窯灰原実測図



▲ 5号灰原（調査前）



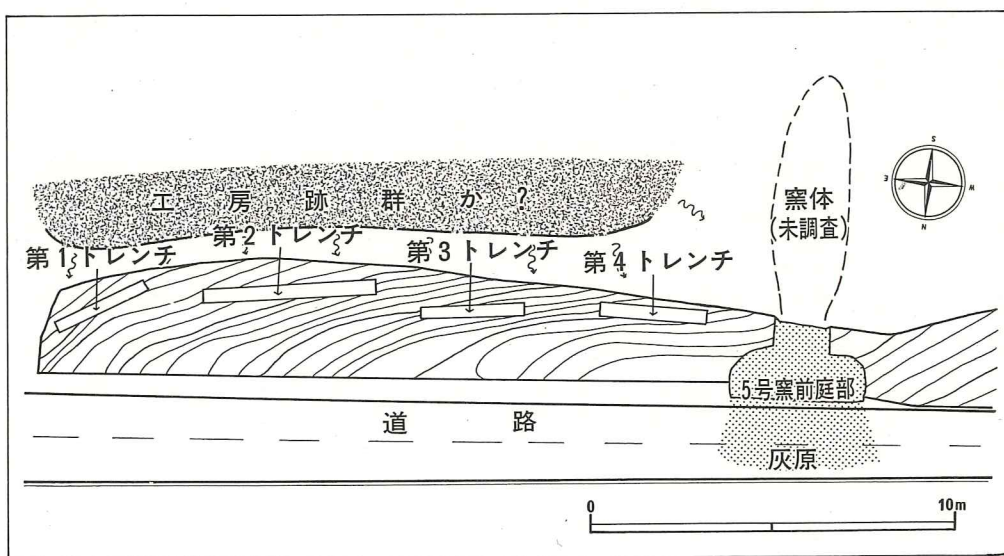
▲発掘調査中



▲灰層堆積状況



▲完掘写真



▲衛門坂古窯南地区実測図



▲第5トレンチ調査状況



▲第6トレンチ調査状況



▲南地区斜面（東より）



▲南地区斜面（西より）



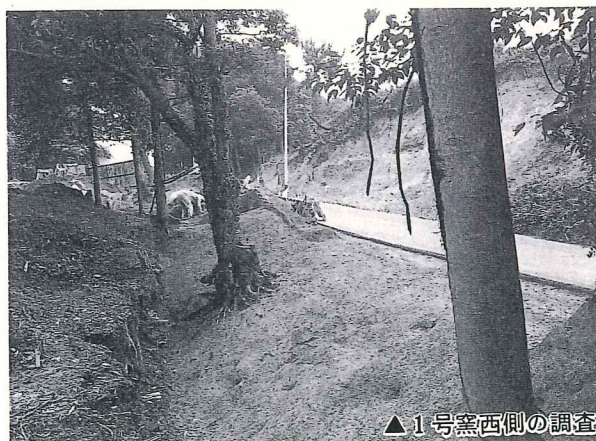
▲失われた窯体（東より）



▲失われた窯体（西より）



▲北地区の窯の残存状況



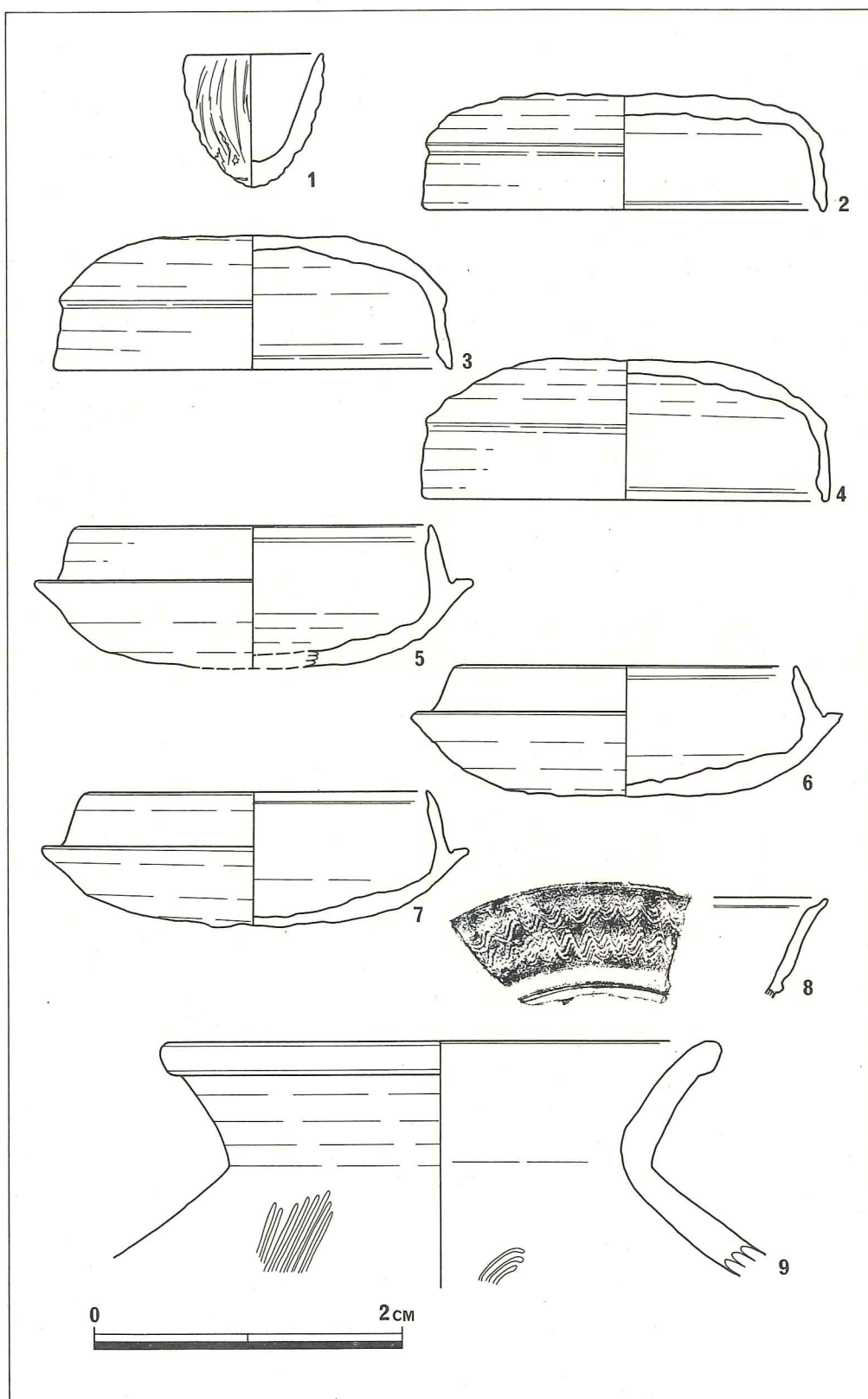
▲1号窯西側の調査

その他の調査について

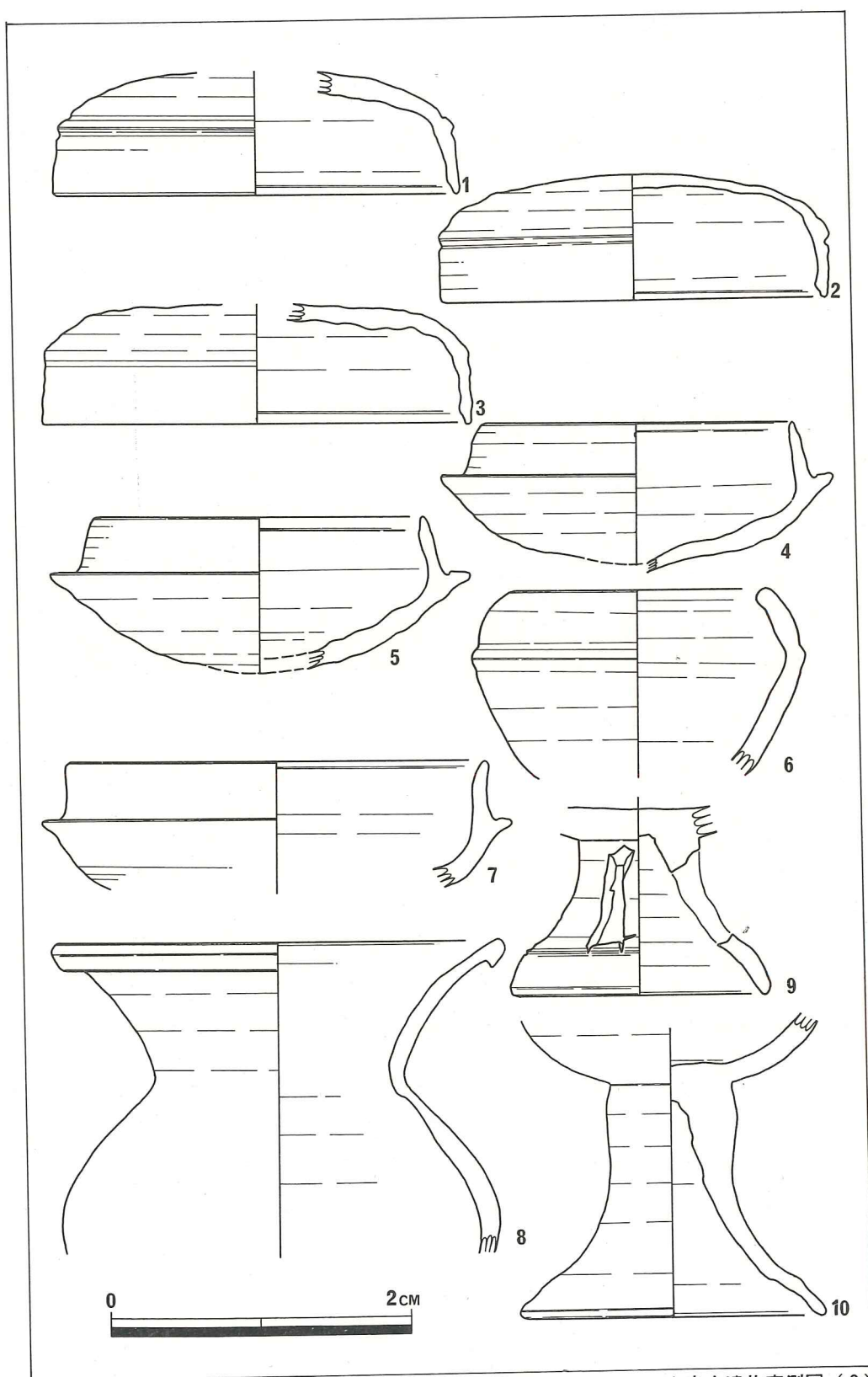
23ページの写真について若干の説明を加えたい。第5トレンチと第6トレンチは、道路北の東側空き地に設定したトレンチである。ここは、谷間の斜面に不燃物を埋め立てたところで、本来は急峻な斜面に人が歩いて通れるほどの狭い道が通っていたところである。トレンチ内は、農葉の空きビン、ガラス、瓦、ゴムなどが厚く堆積していた。しかし、この中では、遺構・遺物は確認できなかった。南区斜面は、5号窯の東側一帯にあたるが、若干の須恵器片・埴輪片が流れ込んだ状況で検出されたが、期待した窯体や灰原は検出することができなかった。この写真の後、だめ押しのトレンチを4本設定し最終確認をおこなった。西からの写真で、中央に市教委で設置した文化財説明板、右側に5号窯の灰原が黒く写っている。失われた窯体は、1号窯～4号窯の窯体を削って作られた市道の南側のカッティングである。調査前は、夏草が生い茂り、崩落した土砂が厚く堆積した斜面であったが、精査の結果、窯体や煙道などは確認できなかったが、崩れ落ちた土砂の中に多量の須恵器片や埴輪片を検出することができた。またカッティングより、白色の粘土の層が確認され、原料をこの地で採集したことを確認した。地元の人の話によると小笠山の各地には、このように粘土を採集できる場所が数ヶ所確認できるそうである。このような粘土を採集できる場所は、礫層と粘土層の境目で土砂崩れがおこりやすく、大雨の時は、山崩れをおこし現在も道路が不通になったり、民家が被害をうける場合がある。衛門坂の地で操業されるきっかけとして、山崩れのため粘土が現れ、その土が工人の目にとまり窯業が開始されたと考えられる。北地区の窯の残存状況は、市道の拡幅により削られ、わずかに残った窯の焚き口から前庭部・灰原のむけての写真である。道路に面した部分は、灰層のあちこちを盗掘されて3号窯付近は、スコップで掘った大穴が開けられていた。アスファルト舗装のあたりが1～4号窯の窯体があった部分である。写真中央の杉より北側が灰原であったが、不燃物が厚く投棄されていた。1号窯西側の調査は、新たな窯の有無を確認するため調査区を拡張した。また、現場を見学に来た地元民より、かつて静岡大学が埴輪を採集した時、もっと西側も掘っていたとの証言により今回の発掘となった。しかし、この丘陵が北に大きくカーブする付近まで調査したが遺構は確認できなかった。

第8章 遺物の概要について

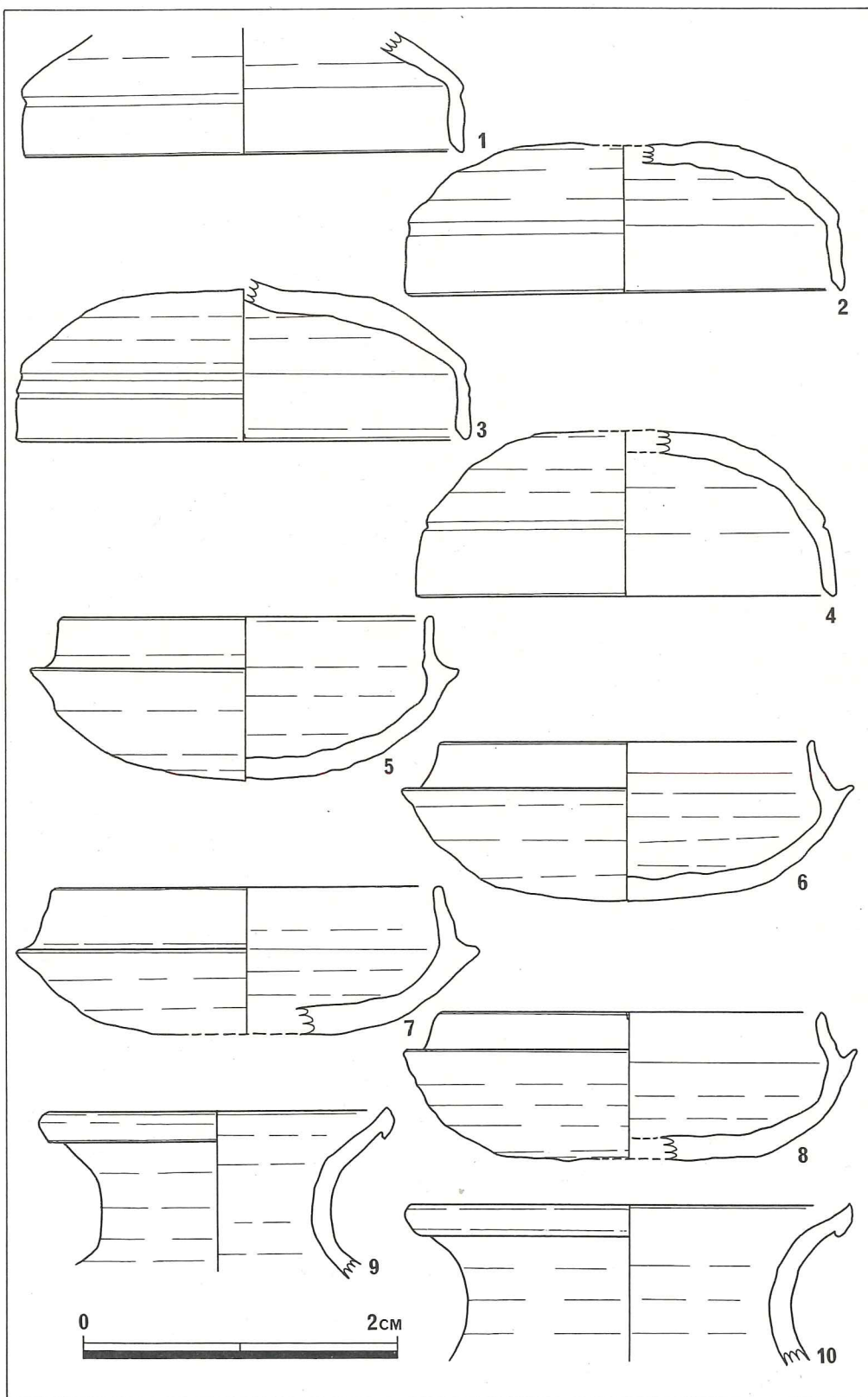
遺物は、須恵器・埴輪片など合わせてテンバコに約60箱の分量である。埴輪片の大きなものは、テンバコ内に収納できないほどの大きな破片も採集されている。24ページの遺物のうち、1は1号窯の西側より出土したミニチュア土器である。2号窯の灰原は、ここまで及んでいないため、どの窯の操業に伴うものか時期の確定はできないが、3号窯・4号窯の操業時に主に使用されたと考えられる搬出路がこのすぐ横を通っているため、埴輪製作に係わった工人の所有物だったかもしれない。24ページの2～9と25ページの1～10は2号窯の前庭部及び灰原出土の遺物である。26ページの須恵器と28ページの須恵質埴輪は3号窯の灰原から、そして27ページの遺物は5号窯の灰原の出土である。今回の報告では時間と予算の窮乏とともに調査員の力不足から、ほとんどの遺構について、その遺物を満足に報告することができなかった。総数



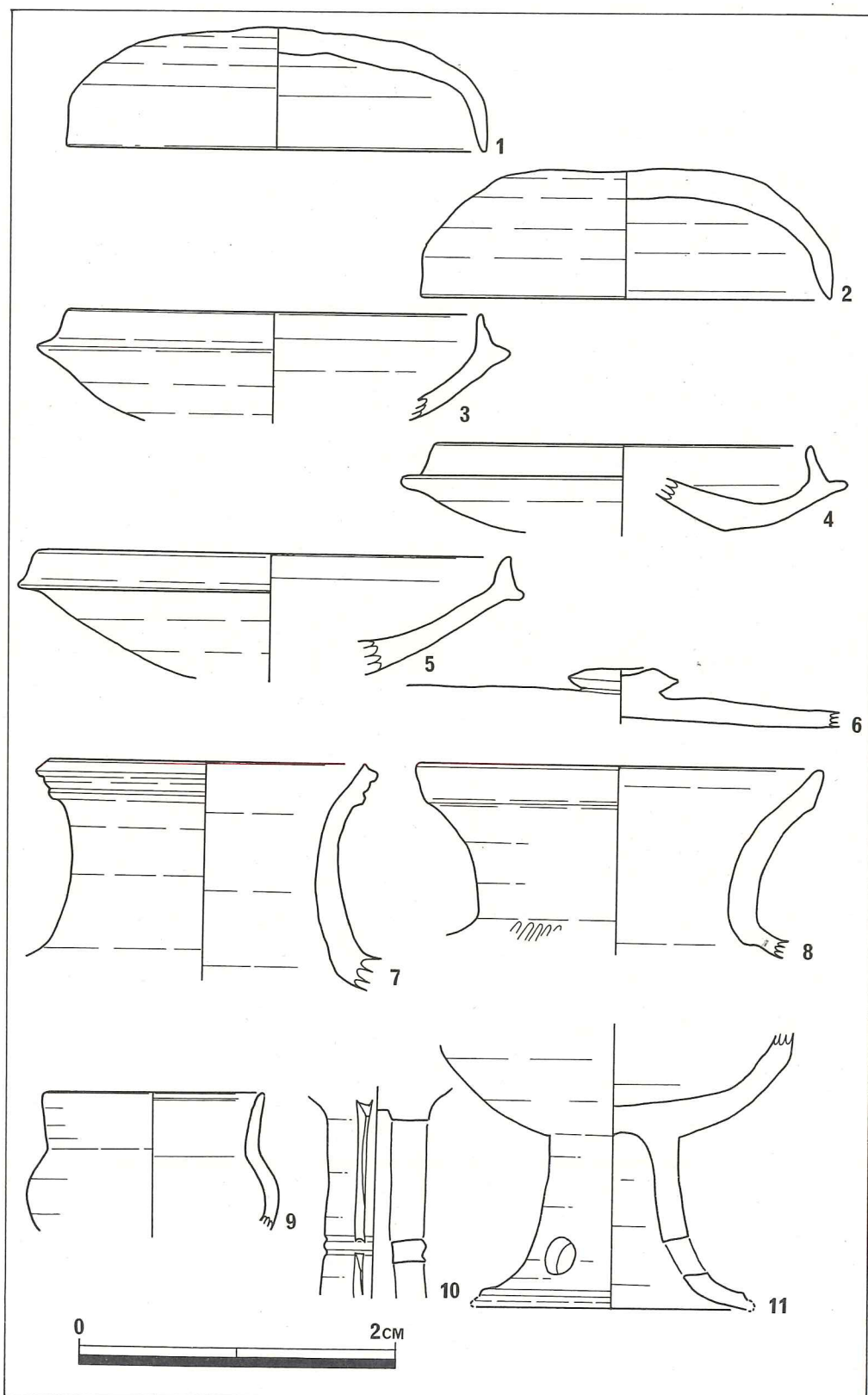
▲出土遺物実測図 (1)



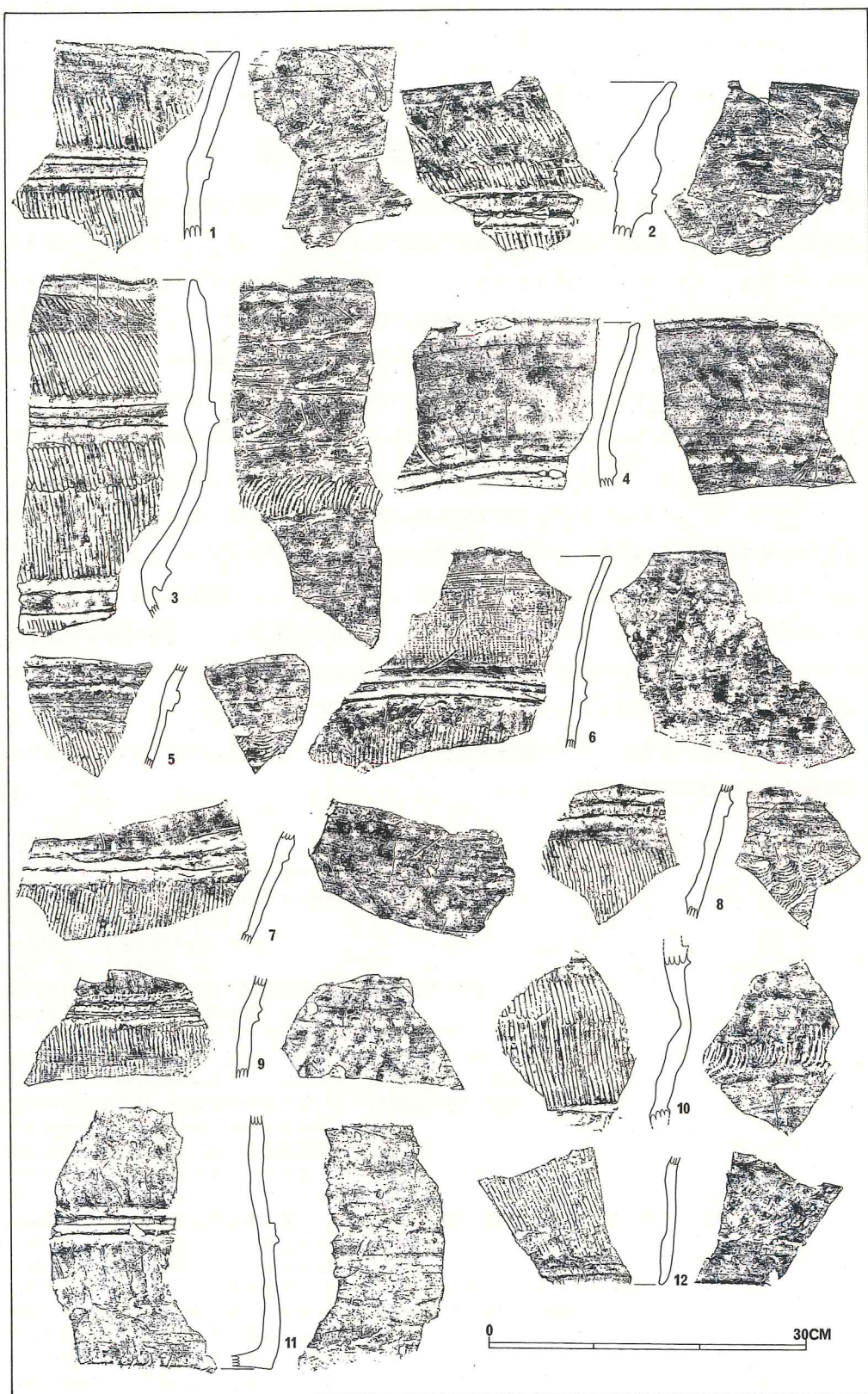
▲出土遺物実測図(2)



▲出土遺物実測図 (3)



▲出土遺物実測図（4）



▲衛門坂 3 号窯灰原出土須恵質埴輪拓影

63 農免中遠南部2期地区
調査委託その1報告書

衛門坂古窯跡

1989年2月27日

編集 静岡県袋井市教育委員会◎
袋井市国本 3070-1
TEL 0538 (43) 2111

印刷 (有)エム・エス・シー
袋井市久能 1977の7
TEL 0538 (42) 3164